

広島平和記念公園観光案内における「平和景観」の変容

Transformation of 'Landscape of Peace' in Tour Guide of Hiroshima Peace Memorial Park

千代 章一郎*
Shoichiro Sendai*

This paper aims to clarify the transformation of 'landscape of Peace' in Hiroshima Peace Memorial Park known as the lesson of the war, analyzing both the representation of landscape composed by the development of facilities or the administrative control of landscape, and the value of landscape by the sightseeing bus tours. As the result, we point out that the north-south axis between Hiroshima Peace Center and A-bomb Dome has been emphasized in the making process of the landscape of this park. However, for the importance of this axis, the extent of urban landscape outside the park is limited.

Keywords: Landscape of Peace, Tourism, Hiroshima Peace Memorial Park, A-Bomb Dome, Hiroshima Peace Memorial Museum
平和景観, 観光, 広島平和記念公園, 原爆ドーム, 広島平和記念資料館

1. 研究の背景と目的

本稿では、都市における「平和景観」生成の一端を考察するために、被爆都市広島的主要施設である広島平和記念公園に着目し、その施設整備と観光案内から広島平和記念公園の景観変容過程を明らかにする¹⁾。

「平和」の概念規定は人間・自然の暴力性に関連して多岐に渡るが、本研究では差し当たって戦争に関する負の遺産の保存・再生に関連する景観を「平和景観」の主題とする。とくに負の遺産の継承については、政治的・社会的な分析が試みられてきたが¹⁾、イデオロギーとは異なる文脈での都市景観的な成果が求められていることは、「世界遺産」の概念においても明らかである²⁾。

そこで本稿では、被爆都市広島の復興計画において主要な施設である広島平和記念公園を対象として「平和景観」の変容過程を明らかにする。周知の通り、1949年の「広島平和記念都市建設法」の特別立法によって公園整備が着手され、1996年には北東の原爆ドーム(旧産業奨励館)が世界遺産に登録されている³⁾⁴⁾。この過程で、紆余曲折を経ながら様々な施設整備や景観コントロールが、広島市によって実施されている。

しかしながら、それらの即物的、表象的な景観のみで「平和景観」が形成されているわけではない。「平和景観」の場合、グローバルな景観価値を含んでいると考えるならば、市民的な景観価値と同時に他者にも共有され得る景観価値を主題化する必要がある。そこで本稿では、観光案内に限定的に着目して平和景観の変容過程の一断面を分析する。

既往研究として、戦後復興事業に関する石丸の研究がある^{5)~7)}。また、広島平和記念公園の全体構想を策定した丹下健三の活動履歴やその役割についての研究がある⁸⁾。一方、平和博物館については立命館大学国際平和ミュージア

ムを中心とする学術研究成果がある⁹⁾¹⁰⁾。加えて、定期観光バスによる広島市の観光景観の形成については千代・横山の研究がある¹¹⁾¹²⁾。しかしながら、いずれも建築物単体もしくは都市計画行政や広域の都市景観に関する分析であり、観光案内による平和景観の具体的な変容過程を継時的に分析したものはない。

2. 研究方法

一次資料としては、広島市公文書館所蔵の各種行政資料、行政文書を補完するための中国新聞社所蔵の新聞記事・写真(未掲載を含む)¹²⁾、及び広島バス株式会社による観光案内テキストを用いる。

とくに平和景観形成に関する観光案内の変容を分析するにあたり、広島平和記念公園内の観光案内として代表的な3つの団体として、広島バス株式会社が運行している定期観光バス、広島平和記念資料館が研修を行っているヒロシマ・ピース・ボランティア、広島市観光ボランティアガイド協会を取り上げた¹³⁾。1999年から2000年時点における3つの観光案内を比較したところ、案内する順路や案内する場所が近似していたため、変遷を追うことの出来る資料が現存する広島定期観光バスの観光案内を定型の観光形態として分析対象とする。

広島市の定期観光バスを運行している広島バス株式会社のバスガイドが観光案内の内容を暗記するために用いる資料であり、バスガイドの教育者によって作成された社内文書である。基本的にこのテキストの内容に忠実に案内が行われていることから、これを観光案内の分析を行う上での一次資料とし、現存が確認される1962年、1973年、1982年、1985年、1991年、1999年作成の観光案内テキスト全6冊を用いる。そして本研究では、観光客が観光案内の説明

* 正会員 広島大学大学院工学研究科 (Hiroshima University)

を受けて、実際に碑や施設などの主対象(視対象)を見る場所を視点の位置として扱うこととした上で、観光ルート、視点の位置、視対象、観光案内内容の変遷を分析する⁽⁴⁾。

本稿では、はじめに広島平和記念公園の表象的な景観変容に関する施設整備経緯や景観行政の施策を大きく3期に分類して変遷を整理する(3.)。次に、定期観光バスツアーにおける広島平和記念公園の観光案内を4つの観点：観光ルート、視点の位置、視対象、観光案内内容について経年変化を分析する(4.)。すなわち、まず、公園の復元図上に観光案内テキストの内容から推測される観光ルート、視点の位置、視対象を重ねて示し、視点の位置・視対象の関係について分析を行う。そこで得られた景観構成に重要と考えられる2つの視点の位置に注目し、その2地点での観光案内内容の変遷を分析する。以上から、観光案内における広島平和記念公園の景観変容をまとめ、考察を加える(5.)。

3. 広島平和記念公園における施設整備と景観施策

まず公園の施設整備については、1950年の丹下健三による「広島平和記念会館総合計画」に基づき建設が進められ、1969年度策定の「広島平和記念公園基本整備計画」、1988年度策定の「平和記念公園再整備基本計画」に基づき整備が行われている。それらの整備計画を基準として、公園の変遷を3期に分類し各時期を復元した図を表1に示す⁽⁵⁾。

表1より、公園の形成・整備過程に注目すると、第1期(1950～1969)は元安川、本川に囲まれた三角州部分と、平和記念施設(広島平和会館原爆記念陳列館(現：広島平和記念資料館西館)、広島平和会館本館(現：広島平和記念資料館東館)等)、平和大橋など公園の基盤施設を中心に形成される。丹下による原爆ドームと平和記念施設を結ぶ南北軸と平和大通りの東西軸の都市計画的実現の過程である¹³⁾。

第2期(1969～1988)以降は、1967年の原爆ドーム保存の市議会決議を受けて、原爆ドームの保存工事や周辺河川など公園の外郭部分が整備され、徐々に公園の領域が外側

へ広がっていく。また、公園の構成要素に注目すると、第1期は基盤施設の他に慰霊碑や像などの建造物のみが点在していたが、第2期には公園全体に建造物が広がる。また第2期から第3期(1988～)にわたって建造物に加えて、被爆前後の公園となる前の様子を説明する、または建造物の設置や保存を記念する目的で設置された説明板⁽⁶⁾が新たに加わり、増加していく。

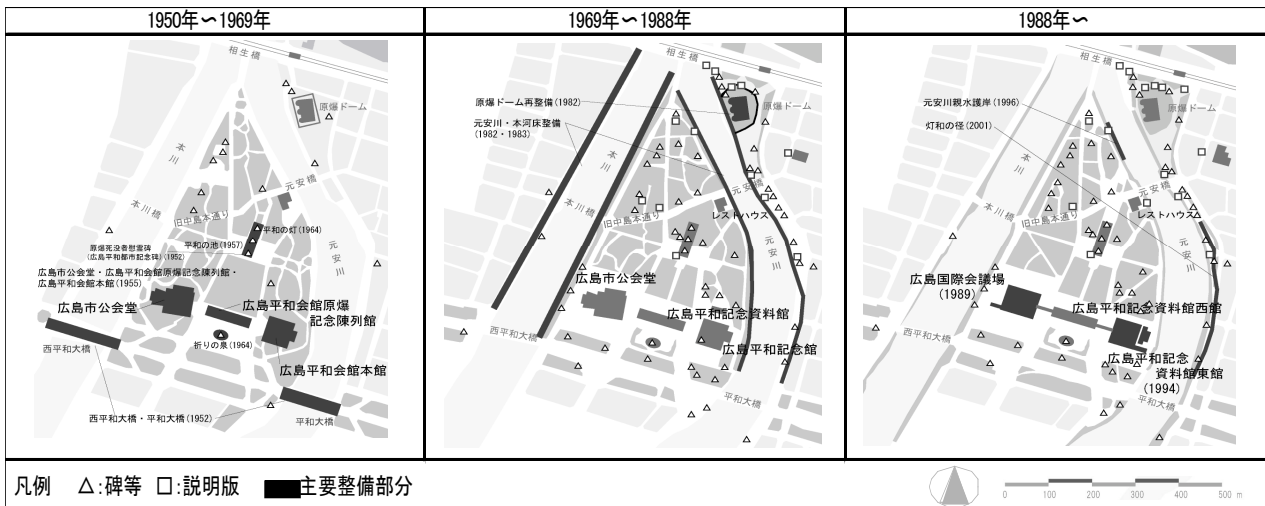
そして、第3期は基盤施設(東館等)の新築工事など、施設の老朽化や広島平和記念公園の平和都市としての性格をより強めるため、大きな構成要素が変化すると同時に河川整備も拡充されていく。

次に、平和記念公園の景観施策については、主に周辺建物の景観コントロールに関するものである⁽⁴⁾。広島市では、「平和都市」としての独自性を発揮するために、1979年に「都市美づくり推進担当」を企画調整局に設置、1981年の「広島市都市美計画」を策定して以来、屋外広告物などの規制の取り組みを続け、1995年には「原爆ドーム及び平和記念公園周辺建築物等美観形成要綱」を策定して周辺建物の景観協議を進め、1996年には原爆ドームが世界遺産に登録されている。しかし、世界遺産として周囲の景観を含めて保存することを理想としながら、周辺住民の利権を制限しないことでバッファゾーンの設定にこぎ着けたことも事実である⁽⁵⁾。そして、結果的に、それが原爆ドーム周辺に乱立するマンション景観を生むことになった。

4. 広島平和記念公園における観光案内

広島定期観光バスの観光案内における景観論的な諸要素として、観光ルート、具体的に説明を行う視点の位置及び視対象、それに観光案内の具体的な案内内容を加えた4要素について、観光案内テキスト全6冊(1962、1973、1982、1985、1991、1999年発行)を用いて復元し⁽⁷⁾、各要素の経年変化をまとめる。また、各々の経年変化は、旧中島本通りを隔てた北側と南側でルートの変化や視点の位置・視対象の分布傾向が異なるため2つの空間に分けて分析を行う。

表1 平和記念公園の施設整備



4.1. 観光ルート

観光案内テキストから観光ルートを地図上に図示したものが表2である⁸⁾。広島平和記念公園において観光客は、各時期を通して、原爆ドームを左手に見ながら相生橋を渡ったところで下車し、北から南下するように公園について下車案内を受け、西館の南側から再びバスに乗車することがわかる。

元安橋と本川橋を結ぶ旧中島本通りを隔てた公園の北側のルートは、下車地点から南下する直線的なルートから、1985年以降元安川沿いや慰霊碑沿いを通り、東西に移動しながら南下するルートへと変化し、ルートが延長、案内範囲が拡大する。

一方、南側のルートに大きな変化はなく、南北の軸線上に沿って西館に向かって南下し、西館へと案内するルートである。案内するルートに含まれているのは西館・東館の連結後も西館が中心であり、観光案内において西館が最優先されていた。

4.2 視点の位置

観光バスルートと同様の方法で表2の地図上に視点の位置を図示する。広島平和記念公園の観光案内における視点の位置を乗車案内中と下車案内中に分類すると、相生通りと平和大通りの2地点を除いて下車案内内である。

公園の北側における下車案内での視点の位置数は、1962年は3地点であったものが1973年には5地点、1999年には7地点に増加し、点在していたものが徐々に北側全体に分布し、公園北側では設置物の増加が視点の位置の増加と分布範囲の拡大に影響を及ぼしている。

一方、南側の視点の位置は、ルートの変化が小さいことから各時期を通して地点数や地点位置に大きな変化はない。視点の位置のほとんどが南北の軸線上にあり、軸線が重要視されていたことがわかる。

4.3 視対象

観光バスルートと同様の方法で表2の地図上に視対象を図示する。広島平和記念公園の観光案内における全体の視対象の数に注目すると、とくに1962年、1973年、1985年の3段階で増加している。これは、公園内の設置物の増加による視対象の増加と、以前から設置されていた公園内の設置物が新たな視対象となっているためである。観光案内における視対象は公園内設置物（慰霊碑などの建造物と説明板）、公園内建造物（広島平和記念資料館等の施設）、公園外建造物、自然物に分類することができるが、公園内建造物は1962年から視対象数に大きな変化はない。

公園の北側における視対象は、公園内設置物の増加による三角州内の視対象の増加を経て、1985年以降、公園外の

表2 視点の位置と視対象の関係図

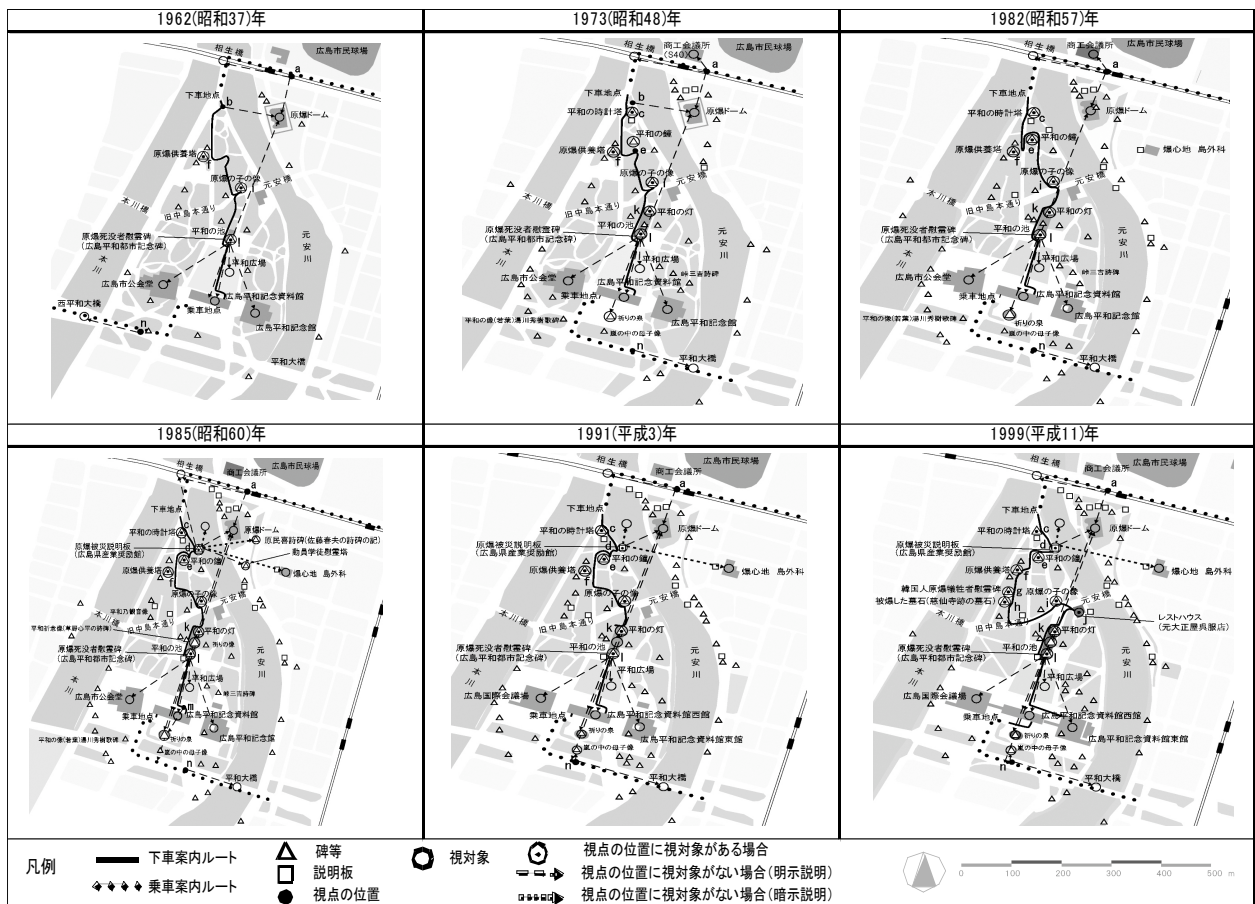


表3 視点の位置における視対象の変遷 (斜線は当時建設されていないことを示す)

地点記号	視点の位置	視対象					
		1962(昭和37)年	1973(昭和48)年	1982(昭和57)年	1985(昭和60)年	1991(平成3)年	1999(平成11)年
a	相生通り	原爆ドーム 相生橋	商工会議所 原爆ドーム 相生橋	商工会議所 原爆ドーム 相生橋	原爆ドーム 相生橋	原爆ドーム 相生橋	原爆ドーム 相生橋
b	下車地点付近	原爆ドーム	原爆ドーム				
c	平和の時計塔		平和の時計塔	平和の時計塔	平和の時計塔	平和の時計塔	平和の時計塔
d	原爆被災説明板 (広島県産業奨励館)				原爆被災説明板(広島県 産業奨励館) 原爆ドーム 相生橋 爆心地・島外科 元安川(灯籠流し) 原民喜詩碑 勲員学徒慰霊塔	原爆被災説明板(広島県 産業奨励館) 原爆ドーム 爆心地・島外科 元安川(灯籠流し)	原爆被災説明板(広島県 産業奨励館) 原爆ドーム 爆心地・島外科 元安川(灯籠流し)
e	平和の鐘		平和の鐘	平和の鐘	平和の鐘	平和の鐘	平和の鐘
f	原爆供養塔	原爆供養塔	原爆供養塔	原爆供養塔	原爆供養塔 遭難横死者慰霊供養塔	原爆供養塔 遭難横死者慰霊供養塔	原爆供養塔 遭難横死者慰霊供養塔
g	韓国人原爆犠牲者慰霊碑						韓国人原爆犠牲者慰霊碑
h	被爆した墓石 (慈仙寺跡の墓石)						被爆した墓石(慈仙寺跡の 墓石)
i	原爆の子の像	原爆の子の像	原爆の子の像	原爆の子の像	原爆の子の像	原爆の子の像	原爆の子の像
j	レストハウス						レストハウス
k	平和の灯		平和の灯	平和の灯	平和の灯 平和の池	平和の灯 平和の池	平和の灯 平和の池
l	原爆死没者慰霊碑	原爆死没者慰霊碑 原爆ドーム 広島市公会堂 本館・ピロティ 東館 平和広場	原爆死没者慰霊碑 原爆ドーム 折りの泉 広島市公会堂 本館・ピロティ 東館 平和広場	原爆死没者慰霊碑 原爆ドーム 折りの泉 広島市公会堂 本館・ピロティ 東館 平和広場	原爆死没者慰霊碑 原爆ドーム 平和の灯 折りの泉 平和大通り 広島市公会堂 本館 東館 平和広場	原爆死没者慰霊碑 原爆ドーム 平和の灯 折りの泉 平和大通り 広島市公会堂 本館 東館 平和広場	原爆死没者慰霊碑 原爆ドーム 折りの泉 平和大通り 広島市公会堂 本館 東館 平和広場
m	広島平和記念資料館北側				折りの泉		
n	平和大通り	西平和大橋	平和大橋	平和大橋	平和大橋	嵐の中の母子像 平和大橋	嵐の中の母子像 平和大橋

表4 原爆被災説明版による案内内容 (見えない対象に対する説明はイタリックで示す)

		視対象						
		原爆ドーム	相生橋	爆心地	原民喜詩碑	勲員学徒慰霊塔	灯籠流し	
説明板設置 以前	1962年 (昭和37)	(停車説明) 「左手を御覧下さいませ。元安川に、荒れ果てた影を映しております建物は、大正四年、ドイツ人の設計によって建てられました。広島県産業奨励館です。想い起こせば17年前、昭和20年8月6日、広島市民のささやかな生活が始まりました。午前8時15分、世界最初の原子爆弾は、あの上空、570メートルの所で炸裂したのでございます。…」	(運行説明) 「さしかります橋は、相生橋です。水の輪、広島は島の多い事も名物の一つになっておりますが、この橋は、御覧の様に、Tの字型にかけられた、珍しい橋でございます。右の流れは本川、左の流れは、元安川です。」					
	1973年 (昭和46)	(停車説明) 「左手を御覧下さいませ。見えております建物は、大正四年、チェコスロバキヤ人の設計によって建てられました。広島県産業奨励館です。想い起こせば昭和20年8月6日、広島市民のささやかな生活が始まりました。午前8時15分世界最初の原子爆弾は、あの上空、570メートルの所で炸裂し、ここを中心に…」	(運行説明) 「まもなくさしかりますTの字型の珍しい橋は、相生橋でございます。」					
	1982年 (昭和57)	(停車説明) 「左手を御覧下さいませ。見えております建物は、大正四年、チェコスロバキヤ人の設計によって建てられた広島県産業奨励館でございます。想い起こせば昭和20年8月6日、広島市民のささやかな生活が始まりました。午前8時15分、世界最初の原子爆弾が、あの上空、570メートルの所で炸裂し、ここを中心に…」	(運行説明) 「商工会議所の向うに、我が国でも珍しいT字型の相生橋があり、橋の東側河岸に原爆ドームがございます。」					
説明板設置 以後	1985年 (昭和60)	「皆様、お揃いになりましたか。では、ご案内いたします。どうぞこの説明板を御覧下さいませ。これが原爆ドームの在りし日の姿、「広島県産業奨励館」でございます。チェコスロバキヤ出身の建築家「ヤン・レツル」氏の設計によって、大正4年(1915)4月に完成しました。グリーンのドームを持つモダンな建物でしたが、昭和20年8月6日午前8時15分、世界最初の原子爆弾が580メートル上空で炸裂し、ここを中心に…」	「皆さま、左手を御覧下さいませ。先程通りましたTの字型の「相生橋」は、都心の中心を示すシンボルで、上空からもよく見えますので、原爆投下の目標となつたそうが、…」	「相生橋から約240メートル離れたこちら、右ななめ前方に外科「島病院」があります。…おわかりですか。…空580米で炸裂したといわれています。…」	(少し移動して) 「原爆ドームの右隣の木陰に、広島市出身の作家「原民喜」の詩を刻んだ碑がございます。…」	「続いて右側に、五の塔がございますがおわかりでしょうか。この元安川をはしめる川の川では、しめやかに「灯籠流し」が行われます。…」	「毎年8月6日の夜は元安川をはじめ、市内の川で「灯籠流し」が行われ、死没者の冥福を祈っております。…」	
	1991年 (平成3)	「皆様、お揃いになりましたか。では、ご案内いたします。こちらの説明板をご覧くださいませ。これが原爆ドームの在りし日の姿「広島県産業奨励館」でございます。チェコスロバキヤの建築家「ヤン・レツル」の設計で、大正4年(1915)4月に完成しました。レンガ造りの建物は、グリーンのドームを持つモダンな建物でしたが、昭和20年8月6日午前8時15分、世界最初の原子爆弾が580メートル上空で炸裂し、ここを中心に…」		「皆様、この方向に「外科・島病院」がございます。一般に、原爆ドームを爆心地と云っておりますが、正確な爆心地は、ドームから東へ160メートルの場所、あの島病院の空570メートルの所といわれています。…」				「毎年8月6日の夜は元安川を始め、市内の川で「灯籠流し」が行われ、死没者の冥福を祈っております。…」
	1999年 (平成11)	「お揃いになりましたか?では、ご案内いたします。こちらの説明板をご覧くださいませ。こちらが原爆ドームの在りし日の姿「広島県産業奨励館」(広島県の産業を奨励する目的で作られた)で、チェコの建築家「ヤン・レツル」の設計で大正4年(1915)に建てられました。レンガ造りの建物は、グリーン色のドームを持つ一筋5階建てのモダンな建物でしたが、昭和20年8月6日午前8時15分、世界最初の原子爆弾が580メートル上空で炸裂。…」		「皆さま、この方向に「外科・島病院」がございます。一般に、原爆ドームを爆心地と云っておりますが、正確な爆心地は、ドームから東へ160メートル離れた島病院の空570メートルの所でございます。…」				「毎年8月6日の夜は元安川を始め市内の川で「灯籠流し」が行われ、死没者の冥福を祈っております。…」

表5 戦没者慰霊碑による案内内容

	原爆死没者慰霊碑	平和記念施設(現:本館・東館・広島国際会議場)	
		軸線上	公園内
1962年 (昭和37)	「馬の鞍の見えるこの建造物は、古代のハニワを形どった、原爆犠牲者の慰霊碑でございます。あの石の楕の中には、…」	「前方、資料館の1階、中央の柱の間を通して、この慰霊碑と、原爆ドームは、一直線に結ばれており、構成の美しさを誇って居ります。」	「あちらの記念館と後の原爆ドームとこちらの公会堂を直線で結びますと資料館を底辺とする三角形が出来上がります。お判りですか、これは広島は、デルタの街と申しまして、三角州の上にてきた街ですから、これらの建物を結んで出来た三角形は、広島を表している訳でございます。そしてこの慰霊碑は、三角形の中心にあって云いかえすと、広島を中心にして、47万3千人の市民の祈りの中で永遠に眠り続けられると云う、大きな構想のもとに出来上がっております。」
1973年 (昭和48)	「馬の鞍の見えるこの建造物は、古代のハニワを形どった、原爆犠牲者の慰霊碑でございます。あの石の楕の中には、…」	「前の噴水から、資料館の中央を通して、この慰霊碑と原爆ドームは一直線に結ばれており、構成の美しさを誇っております。」	「あちらの記念館と公会堂、後の原爆ドームを直線で結びますと、三角形が出来上がります。これはデルタの町、広島を表しているのでございます。」
1982年 (昭和57)	「馬の鞍の見えるこの建造物は、古代の埴輪を形どった、原爆犠牲者の慰霊碑でございます。あの石の楕の中には、…」	「前の噴水から、資料館の中央を通して、この慰霊碑と原爆ドームは一直線に結ばれており、構成の美しさを誇っております。」	「あちらの記念館と公会堂、後の原爆ドームを直線で結びますと、三角形が出来上がります。これはデルタの町、広島を表しているのでございます。」
1985年 (昭和60)	「此の建造物は原爆犠牲者の霊を雨と露から守りたいという願いから、御影石で埴輪の家を形どって作られました「原爆慰霊碑」でございます。…慰霊碑は正面に原爆ドームが納まって見えるように制作されています。」	「平和公園に入る立派な門の役目をしている高床式の建物で、平和大通りからもこちらの慰霊碑を拝めるようになっております。」 「前の噴水から、資料館の中央を通して、この慰霊碑と平和の灯、原爆ドームは一直線に結ばれており、構成の美しさを誇っております。」	「記念館と公会堂、そして原爆ドームを直線で結びますと、三角形が出来上がります。これはデルタの町、広島を表しています。その中心に「慰霊碑」を配置して…「安らかに眠ってください」という祈りの構想となっております。」
1991年 (平成3)	「この建造物は、原爆犠牲者の霊を雨と露から守りたいという願いをこめて、埴輪の家を型どって作られました「原爆慰霊碑」でございます。…丹下健三先生の設計によるこの慰霊塔は、正面に「原爆ドーム」が納まって見えるように制作されています。」	「平和公園に入る立派な門の役目をしている高床式の建物で、平和大通りからもこちらの慰霊碑を拝めるようになっております。」 「前の噴水から、資料館の中央を通して、この慰霊碑と平和の灯、原爆ドームは一直線に結ばれており、構成の美しさを誇っております。」	「この3つの建物と原爆ドームを結びますと、三角形が出来上がります。これは、デルタの街・広島を表しています。その中心に慰霊碑を配置して、「市民の祈りの中で、安らかに眠ってください」という祈りの構想となっております。」
1999年 (平成11)	「馬の鞍の見えるこの建造物は、原爆犠牲者の御霊を雨や露から守りたいという願いを込めて、埴輪の家を形どって作られました「原爆死没者慰霊碑」で、正式名は「広島平和都市記念碑」でございます。…正面に「原爆ドーム」が納まって見えるように制作されています。」	「平和公園に入る立派な門の役目をしている高床式の建物で、平和大通りからもこちらの慰霊碑を拝めるようになっております。」 「前の噴水から、資料館の中央を通して、この慰霊碑と原爆ドームは一直線に結ばれており、構成の美しさを誇っております。」	「3つの建物と原爆ドームを結びますと三角形が出来ます。これはデルタの町・広島を表しています。その中心に慰霊碑を配置して、市民の祈りの中で、安らかに眠ってくださいと云う祈りの構想となっております。」

表6 主要な視点の位置から案内される視対象(視対象は網掛けで示す)

原爆被災説明板付近		原爆死没者慰霊碑付近	
1985(昭和60)年以前	1985(昭和60)年以降	1985(昭和60)年以前	1985(昭和60)年以後

視対象が増加し、視対象範囲が原爆ドーム周辺に拡大していく。

公園の南側における視対象は、各時期の観光案内を通して、南北の軸線上と、それに交わる東西方向に配置された公園内設置物、公園内建造物、自然物で構成される。そして、軸線上の視対象の増加により、視対象領域が軸線方向に広がる。したがって、北側と南側で視対象の分布は異なるが、観光案内における視対象領域は徐々に拡大していく。

4.4 視点の位置と視対象の関係

3つの要素の経年変化から、視点の位置と視対象の関係を分析するためにルート上の視点の位置と視対象を線で結び視線方向を示し、位置関係や距離関係を表したものを表2に示す。視点の位置・視対象の関係図より、視線の広がりや説明の方法に注目すると、公園の北側では、比較的1つの視点の位置に対して1視対象であり、地点の前や近距離にある対象物が視対象であったが、原爆被災説明板の設置によって、1985年以降の観光案内では視対象とその範囲が拡大し、原爆被災説明板地点で複数の対象物が説明され、爆心地など遠くのものも視対象に加わる。

公園の南側では、原爆死没者慰霊碑地点において1962

年の観光案内から継続的に資料館や原爆ドームを含めた複数の視対象に対して説明が行われ、軸線方向上、慰霊碑地点を頂点として三角形上に視線が広がっている。

また表3の視点の位置と視対象の対照表からも明らかのように、この2つの視点の位置は視線の多様性を備えていると捉えることができ、景観構成に重要な地点であると推測される。したがって、原爆被災説明板と原爆死没者慰霊碑での案内内容に着目し、その経年変化を分析する。

4.5 観光案内内容

原爆被災説明板は1980年に設置され、1985年の観光案内からこの地点が視点の位置となる。説明板の写真である広島県産業奨励館、爆心地・島外科、元安川での灯籠流しの案内が加わり、表4及び表6に示すように、見えない対象物に対する暗示的な説明、被爆前、被爆後、現在という時間軸に沿った歴史の案内が行われる。

一方、原爆死没者慰霊碑地点での案内内容の変化は表5及び表6に示すように、1973年以降の南北の軸線上の案内に、西館南側に設置された噴水(名称:祈りの泉、設置年:1964年)が視対象に加わる。さらに1985年以降、原爆死没者慰霊碑の制作意図、西館ピロティの設計意図に関する

説明が加わり、「慰霊碑は正面に原爆ドームが納まって見えるように制作されています」など、軸線を意識させる案内へ変化する。

4.6. まとめ

以上、公園の北側では原爆被災説明板設置により、1985年の観光案内を境に観光案内における諸要素が大きく変化する。一方、公園の南側では要素の変化が小さい。定期観光バス案内という限られた所要時間の中での観光案内は、観光客に最も重要な場所やシーンを案内すると推察されることから、観光案内において、継続的に南北の軸線および、その軸線上に位置している西館は公園を構成する重要な要素として位置づけられている。

5. おわりに

広島平和記念資料館西館と原爆ドームを両端とする南北の軸線は経年的に重要視され、軸線に対する案内が増加することにより、軸線景観は強調される。また、原爆被災説明板によって視対象が増え、説明方法も多様となる。したがって、広島平和記念公園の景観が原爆ドームを基点として多角的に構成されていくと考えられる。

とくに、西館から原爆死没者慰霊碑を経て原爆ドームへと至る軸線を明示する景観の構成は、丹下の構想を強化していると考えられる。しかしそれは原爆ドームと西館を結ぶ軸線の内側に限定され、軸線を延長した原爆ドーム北側の景観や広島平和記念資料館と平行する平和大通りとの歴史的な関係については説明されていないように、原爆ドーム周辺を除いて南北の軸の端点から外への拡がりには乏しい⁽⁹⁾。広島平和記念公園内およびその周辺の拡張整備が進む一方で、平和記念公園をめぐる平和景観は観光案内に関する限り公園外への拡がりに乏しく、この南北軸に内に閉塞していくのである⁽¹⁰⁾。

【補注】

- (1) 景観の拡がりは対象とする公園内に限定されないが、本稿では公園内の施設整備や景観施策、そして公園の観光に限定している。なお、平和記念資料館等の建築物内部からの眺望の問題に関しては、別途考察する予定である。
- (2) 中国新聞社に資料室には、広島平和記念公園に関する自社の新聞記事・写真が1950年から網羅的に収集整理されており、時代背景を含めて公園の社会的受容形態を把握した。
- (3) 広島平和記念公園の観光案内を行っているのは、他にも被爆体験証言者などによる公園内の案内を行っている団体が多数ある(被爆体験証言者交流の集い(2007)、「2007被爆体験証言者交流の集い団体一覧表」)。本稿では、一般性が高く定型の観光案内を分析対象としているため、観光客の利用率が高く、案内場所に偏りが無いと思われる3つの団体を対象に取り上げている。なお、3つの団体による公園内の観光案内の開始年代は、広島定期観光バスは1954年、ヒロシマ・ピース・ボランティアは1999年、広島市観光ボランティアガイドは2000年である。
- (4) 1999年以降、現在も他のボランティアガイド同様、定期観光バスにおける案内ルートはほとんど変化していない。とくに2002年には国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が開設されたが、追悼施設であるため観光案内には組み込まれていない。観光案内を通じた平和景観研究の限界であり、今後の課題である。

- (5) 表1の広島平和記念公園の各時期の復元図は、国土地理院発行1万分の1地形図を下地としてトレースし、筆者が作成したものである。各時期に用いた地形図の発行年は次の通りである。第1期:1958年4月10日。第2期:1991年10月1日。第3期:2007年6月1日。また、復元図が地形図の発行年前である第2、3期の復元図は、建設前や工事前の施設等については復元年の状況に従って加筆している。
- (6) 広島市企画総務局国際平和推進部によると、説明板は被爆の痕跡とその記憶を継承するために、被爆時もしくは被爆前の写真を加えた解説文によって構成されている。爆心地から5km以内に1980年から市内に設置が始まり、45基設置されている。設置場所は写真とできるだけ近い場所とされている。
- (7) 観光案内テキストでは不明な点は、事業者やツアーガイドに対するインタビュー調査によって補った。
- (8) 表2の分類は観光案内テキスト発行年に従っているが、大凡公園整備の時代区分と対応する。しかし施設整備が先んじていることは言うまでもない。なお、表2の広島平和記念公園の復元図は、国土地理院発行1万分の1地形図を下地としてトレースし、筆者が作成したものである。各時期に用いた地形図の発行年は次の通りである。1962年、1973年:1958年4月10日発行。1982年、1985年、1999年:1991年10月1日発行。
- (9) 東西と南北の交差する場所として平和記念公園を都市計画的に位置づけた丹下の意図とは異なっている。参考文献13)参照。
- (10) 確かに、負の記憶の風化を防ぐために、限られた時間内で南北軸が優先されるのは当然と言えるかも知れない。また行政施策として、広島平和記念公園周辺の景観コントロールにも限界があろう。しかしながら、本稿で分析したように見えない対象に対する説明技術があることも事実である。

【参考文献】

- 1) 荻野昌弘編(2002)、『文化遺産の社会学 ルーヴル美術館から原爆ドームまで』、新曜社
- 2) D・オドリル、R・スシエ、L・ヴィラール、水嶋英治訳(2005)、『世界遺産』、白水社
- 3) 中国新聞社編(1997)、『ユネスコ世界遺産 原爆ドーム』、中国新聞社
- 4) 被爆建造物調査研究会編(1996)、『ヒロシマの被爆建造物は語る』、広島平和記念資料館
- 5) 石丸紀興(1990)、「戦災復興計画における計画思想とその都市形成に及ぼした影響に関する研究—広島市を例として その1 都市の性格と人口に関して」、日本建築学会論文報告集、No.312、pp.115-122、日本建築学会
- 6) 石丸紀興(2000)、「発掘地層からみる広島平和記念公園における都市の重層構造に関する研究」、都市計画論文集、Vol.35、pp.103-108、日本都市計画学会
- 7) 石丸紀興(1996)、「都市形成と都市景観の変貌—広島市の歩んだ一世紀」、広島市公文書館紀要、第19号、pp.1-36、広島市
- 8) 石丸紀興、李明、岡河貢(2007)、「広島復興都市計画と丹下健三—広島における建築家丹下健三の活動に関する研究 その1」、日本建築学会計画系論文集、No.557、pp.339-345、日本建築学会
- 9) 第3回世界平和博物館会議組織委員会編(1999)、「平和をどう展示するか—第3回世界平和博物館会議報告書」
- 10) 立命館大学国際平和ミュージアム編(2003)、「立命館平和研究—立命館大学国際平和ミュージアム紀要」、第4号、立命館大学国際平和ミュージアム
- 11) 千代章一郎・横山尚(2003)、「広島定期観光バスにおける運行系統の変容」、都市計画学会論文集、No.38-3、2003年10月、pp.685-690、日本都市計画学会
- 12) 千代章一郎・横山尚(2004)、「事業開拓期の広島定期観光バスにおける眺望対象」、都市計画学会論文集、No.39-3、pp.253-258、日本都市計画学会
- 13) 丹下健三・藤森輝信(2002)、『丹下健三』、新建築社
- 14) 広島市(1989)、『広島—都市美づくりこの10年』、広島市
- 15) 広島市(2006)、「広島市の魅力ある景観構成に向けて」、広島市